

自然誌 **だじり** 冬

Natural history

三重自然誌の会情報誌 143号

2025年 3月

瀬峡でヨシススキを刈り取る

ヨシススキは、ススキのそっくりさんですが外来種で、大きな株・群落になることから在来種を駆逐することが懸念され、けっしてよいススキではありません。道路法面等を一気に緑化させるために用いられた吹付種苗に混じっていたようで、タネ会社の罪は大きいと思うのですが、その責任を問う声は不思議と聞かれません。本種の県内における実態については、山本和彦さんが詳細を本誌(No.138, 139, 141, 本号)に報告していますが、やはり自動車道路沿いに広がっているようです。ところが、そのような国策事業から取り残された感のある熊野市紀和町でも負の部分だけは現れ、熊野川の支流である北山川―瀬峡と呼ばれる一の川原で大きなススキがあると思ったらヨシススキでした。和歌山県境にある瀬大橋から下流側に生育しており、直近の生育地は直線距離で約2km離れた奈良県十津川村竹筒の国道311線の法面ですが、風に運ばれる種子ですので容易に広がってくるのでしょう。4株だけでしたのでとりあえず刈り払いましたが、根は当然残っていますし、時期的に種子も散っているでしょうから、今後の動向に注意したいと思います。



写真 瀬峡（熊野市紀和町小川口）に生育するヨシススキ。背の高い3株が本種で、低いのはススキ。2025年1月4日撮影

（清水善吉：松阪市日丘町 1386 - 17）

東紀州に出現したジャンボ植物，ヨシススキ（その4）

山 本 和 彦

ヨシススキは紀勢自動車道と熊野尾鷲道路の開通に伴い，2014年頃から東紀州地域に入り込んできた新しい外来植物です．侵入経路は道路の法面緑化に使用した中国産のススキ種子にヨシススキの種子が混入していたことによると言われています．今回は尾鷲市南部の三木里地区と賀田地区および熊野市内におけるヨシススキの分布状況について報告します．いずれの地区も主要な道路沿いを調査しただけで，全域を調査したわけではありませんが，32箇所のヨシススキ生育地を確認することができました．全域の調査をすればさらに生育地点数は増えるものと思われます．現地調査は2023年11月から2025年2月にかけて実施しました．以下に32箇所の生育状況について報告します．

尾鷲市南部

- 図1-①，②，③ 三木里インターチェンジ（以下IC）～国道311号周辺．熊野尾鷲道路のなかでは尾鷲南ICと三木里IC間の開通が最も早く，2008年に繋がっています．この当時は法面緑化に使用された種子の中にヨシススキの種子は混ざっていなかったようで，道路法面には緑化工事後から2025年2月現在まで認められていません．しかし，2025年2月の調査で道路外の空地①で2株，②の県道159号沿いで1株確認しました．いつ頃侵入したのかは不明です．③は尾鷲市古江町の国道311号沿いの空地で，1株生育していました．2021年のストリートビューには写っていないので，ここへは比較的最近入り込んだものと思われます．三木里町の南部を流れる八十川の川原には今のところヨシススキは認められませんでした．
- ④，⑤ 賀田IC周辺～国道311号周辺．熊野尾鷲道路の三木里ICから南の大泊ICまでの区間は2013年に開通しています．この当時の法面緑化にはヨシススキ混入の種子が使用されたようで，④の賀田IC付近の法面にはヨシススキの大群落が出現しています．また，道路外の周囲の空地にも逸出したヨシススキが多く見られます．⑤は県道70号とそれに沿って流れる古川を含んでいます，ヨシ



図1 調査範囲および尾鷲市南部および熊野市北部で確認されたヨシススキ生育地．①，②三木里IC周辺および県道159号沿い，③尾鷲市古江町の国道311号沿い空地，④賀田IC周辺，⑤県道70号沿い空地および古川の川原，⑥～⑩，⑬～⑮熊野市国道311号沿い，⑪逢神首根トンネル・新鹿トンネル間，⑫熊野新鹿IC周辺，⑬県道737号沿い，⑭八丁峠近くの伐採跡地，⑮新鹿海水浴場，⑯熊野大泊IC周辺，⑰国道42号佐田坂，⑱，⑳県道34号沿い井戸川の川岸．

ススキは県道沿いの空地に点々と認められました。古川では国道311号の古川橋より上流部の川原に30株ほどの群落が見られました。この群落は2014年のストリートビューには写っていませんが、2021年には現在とほぼ同じ規模の群落が写っています。

熊野市北部

- ⑥～⑱ 国道311号周辺、熊野新鹿 IC ～県道737号周辺、新鹿海水浴場。熊野市北部の海辺を通る国道311号沿いでは、2025年2月の調査で⑥～⑩および⑬～⑱の8箇所でヨシススキの生育を確認しました。個体数は⑩が30株ほど、⑥が3株で、他はすべて1株でした。いずれの生育地も2014年のストリートビューにはヨシススキは写っておらず、2021年あるいは2023年頃から認められるようになります。⑪は逢神曾根トンネル・新鹿トンネル間で、その法面はヨシススキで覆われ、道路外の林縁の斜面では逸出したヨシススキの純群落が発達していました。また、ヨシススキは近くを流れる湊川や周辺の空地へも侵入しており、その個体数は2025年2月現在、500株を越えるものと思われます。⑫は熊野新鹿 IC 周辺で、⑪と同様、熊野尾鷲道路沿いの法面はヨシススキで覆われ、さらに県道737号沿いでも IC 周辺でヨシススキの小群落が散見されました。⑬はこの県道を山手へ進んだ道路脇で、2株認められました。⑭は八丁峠近くの伐採跡地ですが、ここでも跡地に何株か生育していました。ストリートビューを見ると、ヨシススキは熊野新鹿 IC の道路脇では2014年から確認できます。⑮は新鹿海水浴場と里川の河口部になります。ここにもヨシススキは侵入しており、2025年2月の調査では砂浜の陸地側と里川の河口部で40株ほどを数えました。ストリートビューには2014年と2018年は写っていませんが、2021年からの画像にはヨシススキらしきものが認められます。
- ⑲～㉔ 熊野大泊 IC およびその周辺、国道42号沿い、県道34号沿い。⑲は熊野大泊 IC とその周辺部になります。ヨシススキは IC 付近の盛り土の空地や斜面によく見られます。特に IC 出入り口周辺は多く、塩崎哲哉氏は2024年に50株ほどのヨシススキを確認しています(塩崎私信)。この周辺のヨシススキは、道路が開通した翌年の2014年から出現していることがストリートビューから読み取れます。IC の南東側に位置する熊野宮川の河口部では、現在20株ほどのヨシススキが大泊橋付近の川岸に生育しています。ここは2014、2018年にはヨシススキは見られず、2021年には出現していることがストリートビューから分かりました。㉑は国道42号の佐田坂で、2025年2月、道路沿いに約100株のヨシススキを確認しました。佐田坂のヨシススキは2018年のストリートビューにも写っています。㉒、㉓は県道34号沿いの井戸川の川岸で、㉒には4株、㉓には5株ほど生育しており、㉒より下流には見られませんでした。ストリートビューの画像ではどちらも2014年にはヨシススキの侵入は認められませんが、他の年度の画像から遅くとも㉑は2024年に、㉒は2021年には侵入していることが分かりました。

熊野市南部

- 図2-㉕～㉘ 熊野市有馬町内。㉕は産田川の中流部に位置し、産田神社より600mほど上流部となります。川の右岸を通っている道路の法面の一部(幅約30m、高さ約20m)に150株前後のヨシススキが繁茂していました。このヨシススキ群落は、法面緑化に使用した種子にヨシススキが混入していた可能性が高そうです。ここでは産田川の川岸にも散見されました。調査は2025年2月に行いましたが、2021年のストリートビューにも同じような規模のヨシススキ群落が写っていますので、法面の緑化工事はそれ以前に行われたものと思われます。㉖は㉕の下流で、産田橋の下流部になりますが、川の両岸に7株生育していました。㉕のヨシススキ群落が発生源となっているものと推測されます。㉗は塩崎哲哉氏からいただいた情報ですが、有馬中学校グラウンドの海側を通る道路沿いで、2024年1月には2株のヨシススキが確認されています。㉘はファーマーズマーケット「ほほえみかん」の裏にある休耕田で2024年に塩崎氏が、2025年には筆者が1株確認しています。㉙、㉚は国道42号沿いの空地で、㉙は2025年2月の調査では5株ほど認められました。ストリートビューからは2018、2019



図2 調査範囲および熊野市南部で確認されたヨシススキ生育地。②産田川中流付近の道路法面，②産田橋下の川岸，②有馬中学校近くの道路沿い，②「ほほえみかん」裏の休耕田，②，②国道42号沿いの空地，②熊野市金山町造成地，②県道141号沿いの空地，②防災球場公園東側斜面道路の法面（熊野市久生屋町），②北山川左岸川原（熊野市紀和町小川口）。

年にはまだ侵入していないように見受けられますが，2023年の画像からは4株ほどが写っています。これよりさらに南下した国道の西側に②の空地があり，ここでは2025年2月現在，約30株のヨシススキを確認しています。ストリートビューから，ここは2019年まではパチンコ店で2021年には更地となり，その後現在まで空地となっていること等が分かりました。ヨシススキは2021年，2023年の画像には出現していませんが，2024年には10株ほどが写っています。ヨシススキは国道沿いに分布を拡大しているようです。

- ② 熊野市金山町。国道311号の金山トンネルを抜け，金山トンネル西の交差点を南に曲がると広々とした造成中の工事現場が見えてきます。②のヨシススキ生育地はこの造成地斜面になり，2025年2月の調査では20株ほどを視認しました。ストリートビューには2014年，2021年，2024年の画像が掲載されていますが，ヨシススキが出てくるのは2024年の画像だけです。ここでは2022年から2023年に侵入したものと推測されます。
- ③，④ 熊野市久生屋町。③は県道141号沿いの空地で，2025年2月に5株ほどの生育を確認しましたが，2021年のストリートビューには写っていませんでした。塩崎哲哉氏は2024年に視認していますので（塩崎私信），ここも2022年以降に侵入しているようです。④は防災公園球場の東側斜面に付けられている道路の法面になり，200株ほどを2025年2月に視認しています。2021年のストリートビューには現在と同じようなヨシススキの純群落が見られますが，それ以前の画像はなく，いつ頃からここで繁茂しだしたのかは不明です。久生屋町や金山町の生育地はここが発生源になっている可能生も考えられます。
- ⑤ 熊野市紀和町小川口。北山川左岸，和歌山県境に架かる瀬大橋下の川原になります。清水善吉氏が2024年12月に4株発見し，2025年2月に筆者が少し離れた所で1株視認しましたので計5株となります。紀和町内の道路沿いには生えていないのに，なぜこんな秘境に生えているのか，驚きでした。清水氏から直線距離で約2km離れた奈良県十津川村竹筒の国道311号の法面にヨシススキが繁茂しているとの情報をもらい，ストリートビューで該当の道路法面を時系列で追ってみました。2013年の画像には崩れかかった法面が見られ，2018年にはその法面の工事が終了し，ヨシススキが目立ちだしていました。さらに2024年にはヨシススキの純群落となっていました。この法面緑化工事は前述した熊野尾鷲道路とほぼ同じ時期ですので，吹き付け種子にヨシススキが混入していたものと思われます。北山川のヨシススキの発生源はここだったと推測されます。今後さらに新たなヨシススキの生育地が増えていくことが危惧されます。

本報告をまとめるにあたり塩崎哲哉氏，清水善吉氏にはヨシススキに関する新たな生育情報をいただきました。お二人に厚くお礼申し上げます。

（やまもと かずひこ：尾鷲市小川西町8-40）

コメツキガニとヒメアシハラガニ

上 田 利 彦

皆さんはコメツキガニをご存じですか？そうです，干潟に生息し直径数mmの砂団子を作る小さなカニです．なかなか警戒心が強く，双眼鏡で遠くから観ることはできてもちょっと近づくとススッ！と住処の穴に逃げてしまい，砂団子をつくるようすを観察するのは容易ではありません．

ならば，自宅で飼育観察してみよう！ということで2024年11月2日，某干潟で砂団子近くにある穴周辺を掘り返し2種類のカニを採集してきました．1種は甲幅5～10mmのコメツキガニで6個体，もう1種の甲幅10～15mmの3個体は手元の図鑑で同定できないまま，それぞれ種ごとに二つの水槽に収容しました．飼育環境は20cm角のキューブ水槽で，干潟を再現するために底砂は県南部の砂浜の波打ち際で採集してきた綺麗な砂を使い，5～10cmほどの厚さで3分の1を陸地，残りを水深1cmほどの水面になるよう変化をつけてみました．海水は水道水で簡単に作れる人工海水です．屋内での飼育なので25Wの爬虫類用のバスキングライトを12時間点灯させています．

餌はコメツキガニが砂団子を作る際，砂に付いた有機物やプランクトンをこしとって採餌することが分かっていますので，手元にあった藻類を原料とした微粉末の飼料を水に溶いて与えてみました．週1回，底砂洗浄・水替えをしていましたが，3週間ほどで砂が黒ずんできて腐敗臭がし始め，この頃からコメツキガニの作る砂団子の量が増えたように思います．当初は水に溶いた飼料を直接こしとっていたのが，やがて砂の表面に飼料や有機物が付着し始めたことから，頻繁に砂団子を作るようになったのではないかと推察しています．砂団子を作るのは，最初の1箇月は人が寝静まった夜間でしたが，徐々に明るい時間帯でも時折姿が見られるようになりました．3箇月を経過した頃ようやく砂団子を作る様子（採餌風景）を観ることができました（写真1）．

一方不明種の方は，中野環さんにヒメアシハラガニと教えていただいたのでネットで検索したところ，干潟性の小型種を捕食することが分かりました．そこで，魚の肝や身，刺し身にしたエビの頭部などを与えてみましたが採餌せず（写真2），現在はフジツボがついた牡蠣殻を投入して様子を見ていますが，1週間たった今もフジツボは元気に採餌のための蔓脚を振っており，それを捕食する気配はないようです．また，ヒメアシハラガニはコメツキガニほどの警戒心はなく，飼育直後から，巣穴に隠れていても子供が上から覗きこんで声をかけると出てくるので人気者になっています．捕食者らしく好奇心が強いカニのようです．

両種とも飼育を始めて4か月たった今も元気に動き回っています．ヒメアシハラガニは1個体が先日脱皮し，その脱皮殻は一晩で無くなりました．捕食者ではあるものの飼料をこしとっての採餌も行っているものと思われます．まだしばらくはあれこれ試しながら観察を楽しめそうです．

（うえだとしひこ 津市久居一色町176-1）



写真1 コメツキガニが砂団子を作る様子



写真2 ヒメアシハラガニと餌（赤エビの脚）の様子

ようこそ三重県産タマキビガイのファミリーに！

中 野 環

タマキビガイ科の貝類は潮上帯から潮下帯に生息するファミリーで、日本には30種ほどが生息します。大きさは5mmほどの種が多いのですが、潮上帯に生息する種が大半を占めるので、潮の干満時刻を気にせずに観察することができます。三重県にはタマキビ、アラレタマキビ、タイワントマキビ、イボタマキビなど8種の記録があります（中野・中2018, 中野2021）。2024年に、ヒメウズラタマキビが三重県に定着したことを確認したので報告します。

文献を調べてみると、今回の観察が初記録ではなく、2003年8月30日に紀北町の片上池の塩生湿地内で1個体が確認されています（木村2004）。報告から20年以上経過しますが、この1個体以外には記録がありませんでした。ところが、2024年11月16日に紀北町東長島で調査を行ったところ複数の個体を確認しました。軟体部を摘出すると、ほとんどの個体がレモン色の卵塊を保有していました（写真1）。1個体のみが鈍い橙色の卵塊でしたので顕微鏡を用いて観察すると、ベリジャー幼生であることを確認しました（写真2,3）。日本産のタマキビガイ科はほとんどが卵生ですが、ヒメウズラタマキビは外套腔内でベリジャー幼生に孵化した後に放出されることがわかっており、鹿児島県では1月頃に新規加入個体が確認されています（河野ほか2017）。繁殖期は三重県においても鹿児島県と同時期であることがわかりました。

また、11月23日に尾鷲市賀田町、12月7日に南伊勢町神前浦、12月8日には阿曽浦でも生息を確認しました（写真4）。12月8日は南伊勢町相賀浦、五ヶ所浦、田曾浦、志摩市浜島町南張、浜島でも調査をしましたが、生息を確認することはできませんでした。現時点では尾鷲市賀田から南伊勢町阿曽浦にかけての海域に生息していることがわかりました。和歌山県の増田泰久さんは半世紀以上に渡り日本中の海岸を歩きタマキビ科貝類を調査した方ですが、2022時点で「知りうる北限は和歌山県白浜町」としています（増田2022）。本種は南方系の種であるイメージが強いですが、温暖化や黒潮蛇行の影響を受けて分布域が北上しているのでしょうか。引き続き記録していきたいと思います。

尾鷲市賀田町でマルウズラタマキビを採集したという情報を莊司好弘さんからいただき、貝殻背面が写った生態写真を見せてもらいました。殻口側の特徴が判らない生体写真で、標本を実見していないので断定はできませんが、周縁の形態を基に検討した上で、ヒメウズラタマキビまたはウズラタマキビではないかと私見をお伝えしました。今後、三重県からマルウズラタマキビの生息について報告されるのを待ちたいと思います。最後になりますが、莊司好弘さんにはタマキビガイ科貝類の生息に関する情報をいただき感謝します。



写真1 卵塊（発生初期）



写真2 卵塊（ベリジャー幼生期）



写真3 ベリジャー幼生（紀北町産）



写真4 ヒメウズラタマキビ(南伊勢町産)

引用文献

河野尚美・富山清升・今村留美子・国村真希2017. 鹿児島湾におけるヒメウズラタマキビ *Littoraria (Littorinsis) intermedia* (Philippi, 1846) の生息地による生活史の比較. *Nature of Kagoshima*, 43 : 379-388.

木村昭一2004. 紀伊長島町片上池の貝類. かきつばた, (29) : 38-40.

増田泰久2022. 私の観た日本のタマキビの仲間達. 紀州生物, (51) : 6-40.

中野 環・中 優2018. みえ生物誌－貝類－. 三重自然誌の会, 205pp.

中野 環2021. 三重生物誌－貝類－ (追加種 I). 三重自然誌, (17) : 61-65.

(なかの たまき：度会町大野木1711-1)

シジュウカラの巣作り

今 堀 聖 史

春から初夏にかけて鳥たちの巣づくりが最も盛んな季節です。暖かな日差しに誘われ野山へ出かけ、公園の木々や里山の雑木林、水辺や草原の小鳥たちに目を向けると、意外な場所に巣をつくっている光景に出会うかもしれません。一例としてカラ類の巣づくりを紹介します。

写真1は草原で巣材を集めているところです。小さなくちばしで何度も咥えなおし飛び立っていきます。写真2はヒガラがヒノキの根元にできた樹洞に巣をつくりヒナを育てている場面です。巣をつくる広さがあり、雨風をしのげて捕食者に見つかりにくい樹洞を探すのは大変なことだろうと推測できます。写真3カーブミラーの支柱にコケを運んでいるシジュウカラ。何度も巣材を支柱の中に運んでいるのを見ていて、巣を作るスペースがあるのか疑問でした。案の定、数日後に訪れると鳥の姿は見えず、きっとあきらめたに違いありません。写真4は建物のひさしの下側にある隙間に巣材を運ぶシジュウカラ。隙間に巣材が詰め込まれていますが、多くの材料が必要でしょう。写真5は庭に伏せてあった植木鉢にシジュウカラが巣をつくり、ヒナが巣立っていきました。孫が住む家なので巣立ったあと植木鉢の中を調べると、厚さ2～3cmに苔が敷き詰められ、産座は動物の毛で碗型に作られていました。ヒナの糞はほとんどなく、汚れていません。来年のために巣箱を掛けようと秋に古材で作り松の幹に結わえておいたところ、翌年にはヒナが巣立ちました。

鳥たちの営巣を見て感じるのはすごい活動をして生きていること、不思議なのは鳥の種数が多いわりに巣のタイプは少ないことです。この疑問に答えてくれる絵本を見つけました（鳥は恐竜だった；鈴木まもる，アリス館。ぼくの鳥の巣絵日記；鈴木まもる，偕成社）お勧めの絵本です。



写真1 2015.5.23 青山高原



写真3 2015.5.23 青山高原



写真4 2012.5.4 伊那市大芝公園



写真5 2012.6.11 伊那市西箕輪



写真2 2016.5.13 矢頭中宮キャンプ場

(いまほり きよふみ：津市久居小野辺町1454-30)

アサギマダラの餌付け

清水善吉

アサギマダラは渡りをするチョウとして有名です。その旅の途上のチョウのために餌(フジバカマ)場が各地で設けられています(写真1)。三重県では東員町から御浜町まで「フジバカマ園」があり、津市がとくに熱心なようです。その主目的は集客、付随して経済効果や環境教育でしょうか。関連ニュース等をみると、一部の実施主体には自己満足・承認欲求もあるように感じます。

経済効果についての資料はありませんが、環境教育についてはどうでしょう。渡りを解明する手法であるマーキングをほとんどの園で規制していますので(写真2)、チョウをみるのが環境教育と位置付けているのだと思われますが、私は逆だと考えています。餌場を設けてチョウを集める行為そのものが誤った野生動物観・知識—野生動物に餌を与えることが善い行いという認識—を促すのではないかと危惧しています。各地にあった猿公園や水鳥への給仕が、農作物被害や疫病リスクの拡大、生態系バランスの変化等を引き起こすことから、閉園や禁止されるケースが増えているなか、アサギマダラの餌付けには問題はないのでしょうか。例えば、中西(2024;本誌139)の「結構でたらめな略南進で海岸に出、後は地形任せでさまよう」個体が、各地に出現している餌場の影響ではないことを願っています。

なお、フジバカマを栽培してチョウを集めることは餌付けであり、これについては議論の余地はありません。また、昆虫研究者の方々は、マーキング規制に対して被害者的立場から問題視する風潮が強いようですが、問題はもっと根本、フジバカマ園そのものにあるように思います。実施主体の善意は疑いがないですが、誤った自然観の発信やチョウの行動変化の可能性等、負の側面が多いフジバカマ園であることを多くの人が認識し、アサギマダラ・野生動物への餌付けの是非を議論すべきです。

(しみず ぜんきち:松阪市日丘町1386-17)



写真1 御浜町川瀬地区のフジバカマ園。2023年11月13日撮影



写真2 マーキング禁止を訴える看板。この看板を見た人はチョウにマーキングをしたら飛べなくなると思うであろうが、この手法で渡りが解明されてきたのであり、誤りである。マーキング調査をしている人を見たら悪人と思えと喧伝しているに等しい。

編集後記

今号は、原稿集めに少し苦勞しましたが、皆さんの協力でなんとか3月中に発行できました。次号は6月発行予定ですので、お気軽にご投稿下さい(善)。

自然誌だより143号 Mie Natural History Research Group News, No.143

発行日 2025年3月24日
事務局 〒515-0835 松阪市日丘町1386-17
清水善吉方 三重自然誌の会
<http://www.zb.ztv.ne.jp/mie-shizenshi>

発行者 三重自然誌の会
郵便振替口座 00800-5-17842 三重自然誌の会
年会費 1,500円(個人)/2,000円(家族)
e-mail:shimizuzenkichi@gf7.so-net.ne.jp